ICTで「分かる授業」

日常的に電子黒板や実物投影機などのICT機器を使い、分かる授業を追究しているのは東京都練馬区立中村西小学校（石井盛博校長、児童331人）。同校ではICTを効果的に活用して学習内容の共通理解を図り、話し合いの中でさまざまな考えに気付かせながら表現する楽しさを味わう子どもの育成を目指している。

小学校

東京・練馬区立中村西小

実物投影機で「分類」

さまざまな考えに気付き 表現する楽しさを味わう

「私はH先生と同じで、手に持っていることを手掛かりにしました」

「へぇ～。僕は2人と違って洋服で分けました」…。

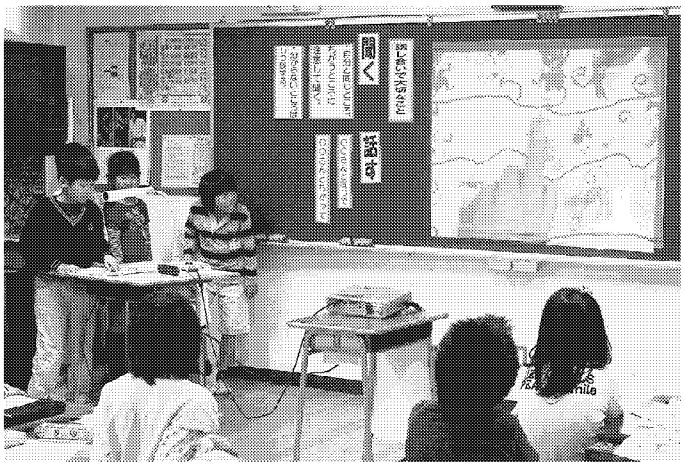
「分類」について、実物投影機を使いながら導入でモデリングを行う3人の教師たち。3年1組の蕪木真由美教諭は、「話す・聞く」の単元「『分類』ということ」（光村図書3年上）の公開研究授業を行った。この授業では進んで自分の思いや考えを話し、自らの考えと比較しながら話を聞く子を目標とした。

この単元では「ねこの分類」という活動を切り口に、お互いの考えの相違点や共通点を考えながら話し合うことができるようになることなどを狙った。前時の授業では教科書に載っている22匹の猫画像のコピーを1匹ずつ切り取り、分類基準を明らかにした上で八つ切りの画用紙に猫画像を張り付けて分類した。

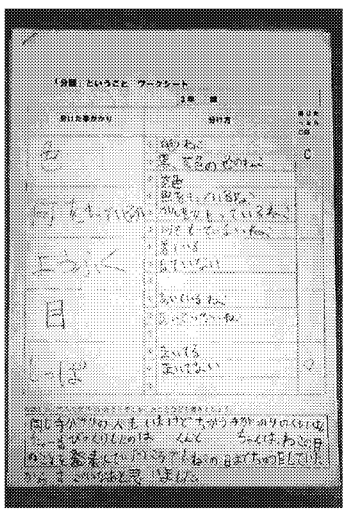
本時は「話し合いで大切なこと」を「聞く」「話す」の授業。例えば、「聞く」では「自分と同じところ、違うところに注意して聞く」などに着目。こうしたポイントを確認した後、何を手掛かりにして猫を分けたかをグループ内で発表した。

ワークシートで「分け方」を説明

「○○さんと同じで、目で分けたのは同じですが、私は目をつぶっている猫で分けました」など、前の子の発表を受けて自らの考えを示す子どもたち。2回目までは猫画像を張り付けた画用紙を使用。3回目以降は、「分けた手掛かり」と「その分け方」について書いたワークシートを使って説明した。その際、自分と同じ考えだったらワークシートに○を記入させるなど、「自分の考えと比較して聞く」ことに意識を向けさせた。

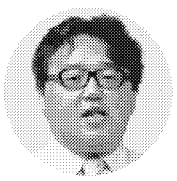


手を使って自分の考えを説明する児童


猫の分け方について書いたワークシート

目標達成への影響踏まえた活用を

堀田　龍也
玉川大学教職大学院教授



ICTに慣れることは、教師が黒板でチョークを使うことに慣れるのと同じことである。板書をどのように構成すればよく分かるようになるかは授業の問題でICT活用も授業の質に依存する。

ICT活用時に教師は何をすべきか、その学習活動は本時の目標達成にどのように影響するのか。

こうしたことを踏まえないと授業は流れてしまう。

そこで、縁取りとなる評価には、目標から外れないように細心の注意を払う必要がある。映像や写真があることで、題材に依存し、話がズレないよう各教科の授業で押さえるべきことを確実に実践しなければならない。

千葉市立轟町小

言語活動の充実へ向けての電子黒板の活用

「使ってみよう」合言葉に 電子黒板で1分スピーチ

千葉市立轟町小学校（佐藤哲校長、児童671人）は昨年1月、電子黒板を活用した教育の調査研究校として全学級に電子黒板を設置した。「とりあえず使ってみよう」を合言葉に、電子黒板の効果的な活用方法について研究。設置から約半年、児童が積極的に電子黒板を活用して発表している姿が見られるという。

理科や算数、小学校英語など、学校現場で抱える課題や実践事例のセミナーなどを扱い、9月下旬に東京で開かれた「NEW EDUCATION EXPO 2010」。そこで町井公明教頭と研究副主任の峰成治教諭は電子黒板の活用について発表した。

電子黒板を導入した当初、町井教頭は「電子黒板につなぐコンピュータが学校にはなかった」と振り返る。そのため、千葉市教育センターから20台のパソコンを借りて研究に着手。「せっかくの機会なので、まずは全学級で使ってみよう」と全学級で電子黒板を使った授業参観を実施した。

本年度は電子黒板を活用しながら各教科における言語活動の充実に取り組んでいる。朝の会の1分間スピーチでは、子どもたちが新聞記事を持って来てその記事の良かった部分を大きく映して説明するなど、一日1回は必ず何らかの形で電子黒板を使っているという。

3つのステップ想定

同校では電子黒板部を設置し、その活動として①ステップA「まず、いろいろな場面で使っていこう」②ステップB「黒板と電子黒板の併用を検証していく」③ステップC「教師の活用から子どもの活用へ（言語活動のアシスト）」―の3つに取り組んでいる。

現在は①を中心に、峰研究副主任は「平面上に置かれた物をビデオカメラで撮影し、それを電子黒板に大きく映し出す書画カメラの使用頻度が高い」と話す。1年図工「箱を使って素敵な家を作る」の学習活動では、図画カメラを使って工夫した点や見てほしい部分を大きく映し出しながら説明させた。ノートに記述した図や表、子どもの考えや思いを共有でき、電子黒板の画像には必要に応じて書き込むこともできる。メモリースティックにはデータを保存することができ、前時の振り返りにはとても効果的だ。

これまでの実践から「書画カメラはノートや資料などの固定できるものには向いているが、動くものにはピント合わせなどに時間がかかるので向いていない」と峰研究副主任は指摘する。千葉市は年度末までに市内小学校全校に校内LANを設置する。今後、同校ではこれまでの実践を踏まえながら学習過程を重視し、電子黒板を活用した活動をステップB、Cへと展開していく。

轟町小☎043・251・8236

日本教育新聞　2010年10月11日掲載